

## 歴史と文化が香る街・川越の歴史を学ぶ

郷土を知るコース 岡村昭則

専科コース第一期生としての二学期は、県外の社会見学や学園祭等の大きな行事があり、郷土を知るコースではクラス全員参加で臨んできました。最後の大きな行事は11月17日実施する、自主企画の「県内施設見学」です。どこにするか案を募ったところ3案が出ましたので、意見を集約したところ「川越小江戸めぐり」をすることに決定しました。川越関係の歴史について、これまで郷土を知るコースでは、「川越氷川神社祭礼の展開過程」、「新河岸川の舟運」と二回にわたって講義を受けてきました。今回、私は姉の入院等で参加できませんでしたが、川越には個人的に30数回訪れて史跡めぐり等行っていることに加えて、伊奈学園での二回の講義で学んだ川越の歴史を簡単に振り返りながら、皆さんが一番関心のある「蔵の街」の歴史について簡略にまとめてみました。

### ★「川越氷川神社祭礼の展開過程」

現在の川越の町づくりの基は、太田道真、道灌父子が長禄元年（1457）に上杉氏の居城として築城してからのこと。江戸時代になり、徳川幕府が江戸北方の防衛拠点として重視し、いつも有能な譜代大名を川越藩主にしたため、この地は他に先んじて近世都市の要素を備え、城下町として隆盛を極め、特に松平伊豆守信綱の時に十か町四門前郷分の行政区画が定められ、ほぼ現在の町が形成されている。また、松平信綱は新河岸川を利用した「舟運」、川越街道や新田開発などの事業を行い、江戸との結びつきを深め、江戸文化を随所に取り入れるとともに、物流も確立させ商人の町としても発達させている。松平齊典の時代、川越藩は17万石となり「小江戸」と呼ばれるにぎわいを見せる。ますます商業的性格をもつ城下町としての様相を深めてゆく。大消費地・江戸と直結させて、めざましい発展を見せた川越。歴代有能藩主もさることながら、商人たちの類いまれな「商魂」が大きい。「小江戸」と呼ばれる賑わいをみせた当時の面影は、元町、幸町、仲町あたりに今なお残る蔵造り家屋をはじめ、川越城本丸御殿、氷川神社、喜多院、東照宮など市内の数多くの文化財にみることができる。

川越祭りの山車川越氷川祭礼は、慶安4年（1652年）川越藩主松平信綱神輿や獅子頭、太鼓などを寄進し、大江戸の天下祭にならい、神幸祭を執り行ったのが川越まつりの始まりといわれている。川越まつりは、川越氷川神社の祭礼から発展し、350年以上の時を経て、現在に至っている。特質すべきことは、城下町住民の精神的統一を図る上に大きな効果があったが、祭礼に掛かるので城主の開催要求を町衆が反対して繰り延べになったこともしばしば。また、質素にならざるを得ない時もあったことが文書で残されている。明治時代に入ると、川越藩の消滅により、藩からの保護は受けられなくなり、かわりに物資の集散地として繁栄を築いていた川越商人の経済力が祭礼を支えていくこととなります。川越まつりには、華麗な山車が蔵造りの町並み

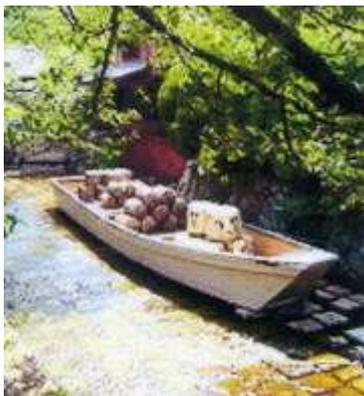


を練り歩き、囃子の音色が秋の小江戸川越にあふれます。祭りは山車・人形・囃子・踊り・ひっかけ（交差点などで山車同士が出会うと、山車の正面を向け合って囃子と踊りを競い合うこと）で構成されている。

### ★「新河岸川の舟運」と川越

新河岸とは江戸中期（1700年以降）に成立した新しい河岸（かし：河川流域の物資輸送基地として舟運を中心に発展した集落）のことを指す。従来の河岸は幕府が設立認可し、主に年貢米の輸送で発展したのに対して、新河岸は民間資本によって設立され、新しいルート（水運）を開拓し、より迅速な物流を展開した。その最盛ぶりから、外川（荒川の舟運）に対して、新河岸川は内川とも称された。新河岸川には、かつて仙波、扇、伊佐島、新倉等の河岸場があった。

高瀬船新河岸川舟運の始まり 1638（寛永15）年、川越東照宮が焼失し、再建資材を江戸から運んだことによる。本格的に舟運開始されたのは、松平伊豆守信綱が川越藩主になってからである。川越五河岸（上・下新河岸・扇・寺尾・牛子）をはじめ、下流に多くの河岸場が開設された。当時、川越藩の年貢米やさつま芋や農産物、木材などの輸送を主要な任務としていたが、年貢米を輸送した帰り荷には、周辺畑作地帯への肥料供給のため肥灰（こえはい）・糠（ぬか）などを積むようになり、しだいに農村部との結びつきを強めていった。



#### 復元された高瀬舟

江戸時代から葛西船（かさいぶね）と呼ばれた下肥船が新河岸川を往来し、沿岸の船問屋の中にはこの肥料を専門に扱っていた店もあった。福岡河岸は、天保年間には三富新田（三芳町）や武蔵野開発による農業生産力の向上によって、大いに繁盛した。最も城下に近い扇河岸は、天和三年（1683）松平伊豆守信輝（信綱の孫）の江戸屋敷が類焼したので、その再建資材を運搬する為に取り立てられた。これに引き続き寺尾、牛子河岸が開設され上・下新河岸、扇河岸と合せて「川越五河岸」と呼ばれた。

昭和37年3月6日、旭橋を中心に川越市指定史跡となった。舟運の全盛期は、幕末から明治初年までであった。舟運の最盛期は文化年間（1804～18）から明治期にかけてであり、明治の中頃までは重要な輸送機関として貢献した。しかし、1914（大正3）年に新河岸川に沿うように東武東上線が開通すると、河岸問屋は荷物輸送に鉄道を利用するようになり、また、1920（大正9）年に新河岸川河川改修工事が始まり、川の蛇行がなくなり直線になると、かつての水量が保てなくなった。ついに1931年（昭和6）通船停止の県の命令が出されることによって、新河岸舟運は幕を閉じることになった。

★「川越氷川神社祭礼の展開過程」、★「新河岸川の舟運」と川越の歴史を振り返ってみても、現在に至るまでの川越の発展は、やはり権力者が町の礎を築きく上にも川の利用を最大限に利用し、江戸との交流を盛んにして文化を取り入れ定着させ、それをベースにして商人が財力をつけ更に町を発展させていった構図が見られます。先人達が造り上げてきた町の文化遺産を「郷土を知るコース」として見て歩きを実施しましたが、誰しも一番関心を持っていたのは、現在、川越の町並み景観を構成する重要な核となっている、一番街通りを中心とした「蔵造りと時の鐘」ではないでしょうか。蔵造り23棟は文化財に指定され、平成11年12月に同地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

## ★「蔵の街・川越」

歴史好きな私は、日本各地を旅する度に、旅先で時間があれば、できる限り歴史ある日本家屋の建築物や郷土資料館や地元の美術館を訪れています。「蔵の街・川越」もその中の一つですが、私の住んでいる大宮の隣町ということもあって、これまでに喜多院への初詣、七福神巡り、本丸御殿、市立美術館・博物館等へ30数回は訪れています。特に私が好きなのは時の鐘を中心にした、土蔵造りの町並みを残す一番街の景観です。



蔵造りの街並み



蔵造りのシンボル鐘つき堂

日本の蔵造りを調べてみると、現在、文化遺産として日本に残されている蔵の街は、昔の城下町や酒造りの盛んだった町に沢山残っている。蔵すなわち土蔵（どぞう）とは、日本の伝統的な建築様式のひとつで、外壁を土壁として漆喰などで仕上げられるもの。日常では単に蔵（くら）とよばれることが多く、この様式で作られた建物は土蔵造り・蔵造りなどといわれる。倉庫や保管庫として建てられるもののほか、保管庫と店舗を兼ねて建てられるものもある。店舗・住居を兼ねるものは「見世蔵（店蔵）」と呼ばれることもあり、倉庫・保管庫として建てられるものとは分化して発展してきた。

●土蔵の起源ははっきりとはしない。中世にも町屋などと共に建てられており、近世、鉄砲の伝来の影響により城郭にも防火・防弾のために漆喰大壁の技術が用いられ、30cm以上の分厚い壁を多用したことで安土桃山時代後期から江戸期前後の櫓や天守などの防御施設は土蔵造りとなった。江戸時代以降には、城郭で発展した技術も生かされ、火災や盗難防止のために盛んに建てられ、後に裕福さの象徴ともなった。明治以降には、土壁の上には漆喰ではなくモルタルを塗り洋風に仕上げられることもあった。また、土壁ではなく煉瓦や大谷石で造られたものもある。現在は、伝統的な外観を生かし、飲食店などの商業施設や博物館に転用されることもある。見世蔵（みせぐら）は、江戸時代以降に発展した商家建築の様式の一つで、土蔵の技術を応用したもの。土蔵の一種ではあるものの、用途が異なることから、枝分かれするかたちで独自の発展を遂げた。

●見世蔵は江戸時代以降に発展した商家建築の様式の一つで、土蔵の技術を応用したもの。土蔵の一種ではあるものの、用途が異なることから、枝分かれするかたちで独自の発展を遂げた。商品などの保管・貯蔵を目的とした土蔵とは異なり、見世蔵は、店舗兼住宅として使うことを目的として建てられるもので、土蔵とは開口部の作り方や間取り・内装が異なる。土蔵の場合は、開口部をなるべく小さくし、耐火壁の部分を多く取って、耐火性能を向上させることを重視して設計される。また内部も、保管・収蔵を目的としているため、細かい間取りなどはなされない。対して見世蔵の場合は、店舗・住居として使うことを主

目的としているため、耐火性能面では多少の妥協がなされ、商店部分の間口や住居部分の窓などの開口部が設けられている。内部の間取りなども通常の商店建築に準ずる。土蔵のほか石蔵の様式を採用したもの、明治時代以降には煉瓦蔵の様式を採用したものや漆喰のかわりにモルタルやコンクリートを使ったものなども見られる。古い宿場町・商都などにはある程度残されているが、近年では観光資源としての積極的な利用に転じている事例も多い。「川越の蔵造り」も見世蔵（みせぐら）がほとんどである。

#### 蔵造り

●江戸末期なっても、川越の商家の大半は依然として木造で板葺きの屋根だったが、その後、川越に多くの蔵造り店舗が生まれたのは、明治26年の川越大火を契機としている。このとき焼け跡にぽつりぽつりと残っていたのが、蔵造りの建物だった。建物全体を厚い土壁で固め、いざというときには窓を閉じて粘土や味噌で透き間をふさぐ。その時代では最高水準の耐火建築だった。つくりも頑丈で、「二階で餅つきができる」とまでいわれた。焼け跡に再建しようとした人たちが、この蔵造りを取り入れたのは当然のなりゆきである。この大火では町の3分の1以上である1300余戸を焼失し、川越は大きな被害を受けたことから、町の復興にあたり川越商人は、日本の伝統的な耐火建築である土蔵を採用した。現在あるこれらの建物は、その多くが明治26年の大火後、火に強い土蔵造りに改めたものなので、これは江戸時代の町の姿ではない。川越を「小江戸」と呼ぶが、江戸時代、すでに不燃化の度合いを高めて、土蔵造りの家の建ち並ぶ町になっていた江戸の姿が、川越に及ぶのは明治になってからということである。巨大な鬼瓦、黒漆喰の無骨な造りは、坂東風土蔵造りというのがふさわしい。当時の耐火建築としては西洋から入ってきたレンガ造りがあったが、川越商人は蔵造りを選んだ。そして、新しい材料であるレンガは、蔵造りの屋敷の塀とか地下蔵に使い込んだのである。黒漆喰と赤レンガの色調がしっくりと合って、町並みを構成する大事な要素となっている。

今も商売を営む蔵造り川越商人の心意気を伝えて川越の蔵造りの商家はそのほとんどが元町、幸町、仲町あたりに集中しており、今なお多くの蔵造りの家がそれぞれの商売を営んでいる。川越における蔵造り建築の最盛期（明治35年）には70軒余りの店蔵があったといわれているが、この裏にはこれだけ急速に蔵造りの商家が軒を並べたことは、川越藩消滅後も、川越は埼玉県随一の商業地として活動が盛んで、穀物の大規模な集散が行なわれ、織物・箆笥を生産し経済交流が活発であったから、川越商人に十分な経済的裏付けがあったといえる。その後の時代の流れが、かつての落ち着いた蔵造りの町並みにも影響をおよぼし、現在、店蔵は36に減少している。

●1975年度には、伝統的建造物群保存地区の制度制定に伴い、市町村は都市計画の地域地区または条例により「伝統的建造物群保存地区」を定め、文部科学大臣は市町村の申し出に基づき重要伝統的建造物群保存地区の選定（日本の文化財保護法第144条の規定に基づき、特に価値が高いものとして国（文部科学大臣）が選定したものを指す。）を行うこととされている。2009年6月現在、日本全国で85地区が選定されている。「川越の蔵造り」が伝統的建造物群保存地区の指定が実現したのは、制度制定発足24年後の1999年4月である。指定の実現までの紆余曲折の報告書を紐解いてみる。『1975年度文化庁が全国的に展開しはじめた町並み調査の対象となっている。しかし、この調査は伝統的建造物群保存地区の指定には直結しなかった。1978年には一番街に隣接してマンションが建設された。こ

のマンションをめぐっては周辺住民が数年におよぶ反対運動を展開していた。このことに危機感をいだいた市が、1981年度に『川越の町並みとデザインコード』という調査を、当時町並み運動のひとつの核になっていた環境文化研究所に委託している。しかし、この提案も具体的な施策として実を結ぶには至らなかった。ほかにもいろいろな調査研究が行われものの、どの報告書も「お蔵入り」している。具体的・実質的な町づくりの動きが始まったのは、1983年の「蔵の会」の結成からである。この会は、町並みに目覚めた市役所若手職員が黒子になり、地元の商店主たちが主役となって、外部の川越町並みファンも加わり結成された。会結成のきっかけのひとつは、市が制作したテレビ番組「蔵づくりの明日を問う」が神奈川県主催の地方の時代映像祭で優勝したことである。その賞金を蔵づくりの町並みを救うナショナルトラスト運動の基金にしたいというのもひとつの動機であった。この蔵の会で取り組まれた町づくり計画を立案する活動が、コミュニティマート構想事業の導入につながり、町並みの整備や店づくりの具体的な町づくりが開始することになる。

伝統的建造物群保存地区の制度制定から24年後に指定されたが、ずいぶん時間がかかっている。なぜ、川越ではこのような時間が必要になったのか。さまざまな理由が考えられるが、コミュニティマート構想は商店街近代化事業の一環であるから、計画内容は、一、全体共同施設（街路を整備するなど）、二、個店整備（個店のマーチャンダイジングと一定の基準に基づく改装など）、三、核施設建設（お祭りを主題にした施設など）の三点セットとなる。しかし、歴史的な建物を生かしていくことが必要な川越では、通常の商店街で取り上げられるこれら項目とは別に、確実な町づくりのシステムが必要であった。そこで、合意形成を担う「町並み委員会」と、開発を担う「町づくり会社」が両輪となって、町づくりを実践していくシステムを組み立てることが構想された。

町並み委員会は、商店街の構成員が「町づくり規範に関する協定書」を締結し、1987年10月に発足した。その後の川越では、町並み委員会は10年以上の実績を重ね現在に至るが、町づくり会社構想はナショナルトラスト的発想もあったが、売りに出す人の物件を買い取る財力がないことなどから実現していない。この間にも、少数ながらも歴史的に重要な建物が壊され、「町づくり会社があったなら」という場面が少なからずあった。重要伝統的建造物群として指定されたので、これで川越の町並み保存はひとつの山を越した。しかし、地図に見るように、町並みにはまだたくさんの空き地と空き店舗がある。川越一番街の町並みがいきいきとした、そして美しい町になるという目標は、未だ達成されていないのが現状である。』と報告している。しかし、この街並みの景観を保存する努力を担い続けてきたのは、地元の市民で構成する「川越蔵の会」であり、それに押されるように行政も景観条例の制定や歴史的地区環境整備街路事業制度を設置して、電線の地中化や下水道工事に合わせて実施するなどして街並みの整備を進めてきた上で、住民自身一番街周辺の町並みを守っていくためには文化財保護法に基づいて、伝統的建造物群保存地区指定を受けることが一番だと結論を出し、1999（平成11）年、ついに川越一番街商店街を中心とした7.8haが伝統的建造物群保存地区として指定された。伝統的建造物群保存地区指定までの道のりは20年以上かかり、そこに至るプロセスには多くの困難が伴ったものの、町を愛する人々の努力の結晶が実を結び現在の蔵の街があるといえる。

●彩の国いきが大学伊奈学園専科「郷土を知るコース」に所属したことから、「川越の歴史」について本格的に勉強する機会を持てたことに感謝あるのみ。先人達によって積上げ

られてきた現在の街並みの裏側にある 労苦を知ることこそが、歴史を正しく学びとる視点ではないかと思っています。この視点をこれからも持ち続けたい。

●江戸の面影を今に伝えることから「小江戸」とよばれ、休日ともなれば大勢の観光客でにぎわう川越での、観光客のお目当ては蔵造りの町並みの散策と買い物である。電線の地中埋設で広くなった空の下、観光客は一番街の重厚な蔵造りの町並みを見てタイムトンネルに入ったような錯覚に襲われる。江戸・明治・大正期の古き良きものがそのまま残っており、時の鐘を含めて、町そのものが博物館のようにも思えてしまうのは私だけではあるまい。この景観を維持するためにどれだけの人々や行政がかかわっているのか一般の人は知る由もないが、せめて蔵の街を楽しんで地元にお金を落とすだけをお願いしています。そうすることによって、街は活気にあふれこの景観と文化財が守られることは確かなことです。